

地区研修会報告

(神奈川県障害者地域作業所横須賀地区連絡会 - 以下横障連)

各地区の研修会について考える。 **広報部**

新型コロナウイルス感染症の位置づけが五類に変わり、様々な事業や行事がもとに戻ろうとしている。とはいえあまりにも長かったコロナ禍での活動、思うようにもと通りかというとこれは苦勞する部分も多い。また新しい生活様式、といわれる中、各地区で様々な工夫をしながら取り組んでいることと思われる。そんな中、今後の在り方を考えるきっかけになればと、横須賀での取り組みでとても参考になる事例を紹介したい。

日中活動の場やグループホームで、多くのダウン症の方が活動や生活をされています。しかし年齢を重ねるなかで、活動や生活のしにくさを感じられる方も多くなっ

ています。今回再び、橋本先生を講師に、ダウン症の方の壮年期・高齢期を支えていくためにというテーマで研修会を開催します。

ダウン症の方の壮年期・
高齢期の生活を
支えていくために

東京学芸大学教授
橋本 創一 氏

K S K

きんづな

第174号

編集 神奈川県障害者地域作業所連絡会
責任者 六反芳樹
印刷所 榎Yuki Print
発行 令和6年1月22日
年月日

～研修会開催の案内文より～
二〇二〇年にダウン症の方の壮年期・高齢期の暮らし方について研修会を開催しました。その際に先生から全国的にまだまだ実態がつかめていないことが報告されました。

横障連では二年に一度橋本壮一先生をお呼びし表記の研修会を実施している。資料から抜粋すると講話の概要は以下のような内容である。

ダウン症とは(染色体異常)
・ダウン症と知的障がい
・ダウン症者の主な発達特徴
(知的障がいの様相も含めて)
・ダウン症の strength & weakness
・ダウン症者の「固まる」現象
・成人期の福祉支援事業所の実践

「急激退行」とは…
・ダウン症のある者と一般者の退行 & ADアルツハイマー病の発症・未発症
・サクセスフル・エイジング
(老化の過程にうまく適応する)

コロナ禍での開催からズームを取り入れたことにより、各地区の障作連会員の事業所からの視聴も可能となった。橋本先生のわかり

で大事なこと！
・ダウン症者にみられる「急激退行」とは…
・ダウン症のある者と一般者の退行 & ADアルツハイマー病の発症・未発症
・サクセスフル・エイジング
(老化の過程にうまく適応する)

ダウン症とは①
染色体の異常による生まれつきの障がい
【染色体の変化(異常)】

ダウン症の男性の染色体

男性の染色体

人間の体は細胞がたくさん集まってできており、その中にあるのが染色体
・染色体は2本で1組になっている。
・人の場合は23組(46本)
→ダウン症の人は染色体に変化が起こっている…

やすい、はっきりとした口調もあるのか、何度聞いても心にしみる内容である。テーマはダウン症についてとなつてはいるが、知的発達障害全般にわたつてもとても示唆に富んだ内容である。

橋本先生は私たちに何を言いたいのか？言葉の節々に出てくる内容は多くの支援者にとつて、日常の支援の中で意識してほしいことが述べられている。利用者に向かう姿勢、知識、何を求められているか、ということを簡潔に支援場面の例を挙げながら説明してくださっている。これまで知らなかつたようなこと、または知つていたとしても日常的には忘れてしまつていたようなこともたくさんある。ダウン症の方はがんにならない？アルツハイマー型認知症の大きな要因としての遺伝子の問題。知つていると何かの時に大きなヒントになるようなことばかりだ。つまりは支援をどれほど「我がこと」としてとらえるかということ。示唆に富んだお話は何度聞いても心から納得できる話だ。

今回は他地区からリモートで参加された方の感想を記したい。

「私の地域には大きな施設がい

くつもあり、街の中でダウン症の方をよく見かけます。実際私が支援したことのあるお一人の例を思い出しました。男性の方です。十年ほどうちの事業所を利用されていました。

彼は寡黙で一つの仕事を黙々とこなし、音楽好きで、ときにはムードメーカー。みんなを笑わせたり、とてもお洒落で雑誌から飛び出してきたようなファッション。仕事をしながらタコのできた柔らかい左手をビューンと広げてその手と会話をしているようなしぐさをする彼。学校時代、成人してから、人との付き合いや仕事の悩み、自分の言いたいことをどれだけ言えたのかな？。ご家族もとても愛情深く、彼のために熱心に取り組んでいらつしゃいました。そんな彼と十数年ぶりにバスの中でばつたり。「〇〇さんお久しぶり。元気だったあ？」彼は「ああ」「ふうん」と相変わらずのダンディぶり。グーツと近づいて私の顔を見てみたり、下を向いたり…。私を忘れたのか？。目も相当悪いのを見ていないのかな。そんなことを思いながら「じゃ、〇〇さんがんばつてね」と声をかけて先に

降りようとした私の背中に「お前もがんばれよ」と。〇〇さんかっこよすぎるよ！。

先生のお話をお聞きして大変勉強になったことを書こうと思いつつ素敵なダウン症の方を紹介、我慢？する形になりましたね。申し訳ありません。今、彼はアラフィフ。退行の時を迎えつつあるのかどうかお元気でありますように。

十一月二十二日

障害福祉計画の

説明と意見交換会

参加事業所がZOOM

でつながり開催

県内の各市町村でも各種施策に対する説明会は行われていると思われませんが、横須賀市ではZOOMを取り入れて障害福祉計画の説明会を行っています。研修会ということではないのですが、とても素晴らしい開催方法と内容です。どんな形かという各事業所と市役所の障害福祉担当者がズームでつながり、職員はもとより、利用者の方も参加しての説明会として

います。県障作連の広報部にもURLを送っていただき視聴参加をさせていただきました。

最初に係長さんから、障害福祉計画とは？計画の作成に向けたこれまでの取り組み・パブリック・コメントについてのたまかな説明があり、続いて今回の計画の成果目標ということで市が掲げている七点を説明しました。

一 福祉施設の入所者の地域生活への移行

二 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築

三 地域生活支援の充実

四 福祉施設から一般就労への移行等

五 障害児支援の提供体制の整備等

六 相談支援体制の充実・強化等

七 障害福祉サービス等の質の向上

七点の説明が終わつたところで

その後、参加利用者さんも具体的な課題について意見を述べてのやり取りが始まります。

・ 地域生活支援拠点

・ 一般就労への移行

・ 日中の活動の場

・ グループホーム

・ 成年後見制度

・ 送迎などのヘルパーのこと

・ 最後に地域活動支援セン

ター(作業所)について。

利用者さんの参加もありましたので、本当にはつきりゆつくりとわかりやすい口調で答えて説明されていきました。すべて喫緊の課題といえる点ばかりです。私たち事業所の職員にとってはいつも聞いている内容なのですが、利用者さんに向けてということで、丁寧に組み立ててお話をされる係長さん。考えていかなければいけない論点がよりはつきりしたとように感じました。

また、利用者さんから、職員さんから切実な意見をたくさん聞くことができました。

「僕は六十六歳ですがお兄さんと一緒に暮らしていますがお兄さんがいなくなってしまうときにグループホームで暮らしたいと思っています。でも今六十六歳なのでグループホームに入るのには難しい、といわれましたがでも僕はグループホームに入り、今の事業

所に通いたいです」と利用者さんの切なるご意見。

「横須賀には重い障害の方をうけ入れるグループホームが少ない。本人たちは自分の地域で暮らすことの方が気持ちとして楽だと思えますが、受け入れる場所がないので市街の施設に行かなければならない。これが数年続いている現状をどうにかならないか?」

「自宅から事業所に通うのにヘルパーさんを使いたいと距離が近いとの理由で使えないので困っている方がいる」それに対してほかの事業所の職員さんから「そのことは市の方でも非常に不明確な基準であるとの提示もされており、本当に困っている利用者さんには使えるようにするべきではないか」というご意見も出ていました。「ヘルパーさんを使って外出をしたい。個人個人ニーズが違うので希望どおりの外出を、とは思いますがヘルパーの数が少ないので

かなえてあげられない」

全体を通して、重度の方のグループホームが少ないこと、ヘルパーの数も少ないという問題が印象として残りました。市はそれに対して補助金等を検討して、その問題点が少しでも充実できるようにしていきたいとの返答でした。

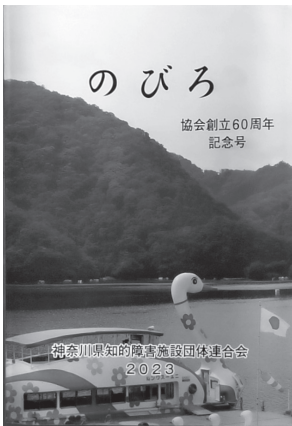
司会進行を担当している海原会長さんが利用者さんのご意見を丁寧に受け止めて利用者さんに返していく様子が大変温かく感じました。印象に残った返答で

「〇〇さんがこの場でこういう意見を持っていることを発言できた。知ってもらえたと思います。相談の方に自分の気持ちを伝えられますか?ぜひ頑張ってください」という返しは本当にこの会の存在意義を感じました。横須賀の意見交換会の時もそうでしたが、利用者さんの生の声で発言することは一番説得力があると思われました。福

祉計画は利用者さんが中心にないければならないことです。多くは法律や施策の難しいことばで議論されますが、原点は利用者さんやご家族の日常生活だと思えます。ZOOMなどの新しい方法でいつでも利用者さんに開かれている場がある。利用者さんが中心となる場がある。横須賀の計画説明会は、素晴らしい研修の機会となりました。

この横須賀の例を見て、皆さん、トライしてみたいと思いませんか?会長さんをはじめ横須賀の皆さんのやさしさと力強さ。いつも大変参考になります。それぞれの地区で頑張りましょう。





幹事活動報告

一般社団法人
神奈川県知的障害者
施設団体連合会

創立六十周年
式典に参加

令和五年十一月五日、ローズホテル横浜にて開催された記念式典に正副理事長、幹事一名で参加した。県内の各施設の方々と会場は満員、六十年という歴史を感じた。式典では主催者、来賓のご挨拶に続いて功労者の方々への表彰が行われた。神奈川の障害福祉を多年に渡りけん引してこられた著名な方ばかりで、改めて感動の気持ちを持った。

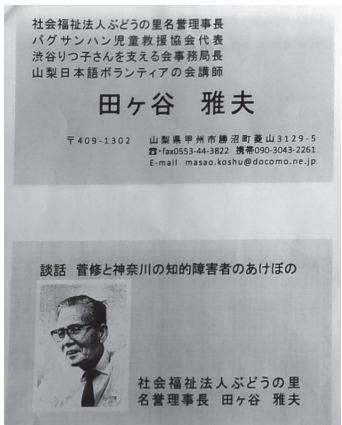
続いて行われた講演。プログラ

ムには談話と記載されているが、設立六十周年にふさわしい記念講演といえる内容だった。「菅修と神奈川の知的障害者福祉のあけぼの」というテーマだ。講師は田ヶ谷雅夫先生、現在は（社福）ぶどうの里 名誉理事長であられる。七十年に及ぶ障害福祉に携われた経験を実にやさしい口調で語られた。テーマにある菅修先生は田ヶ谷先生の恩師であり、大学卒業後県立ひばりが丘学園に勤務された田ヶ谷先生にとつて菅先生との出会いはかけがえのないもの。障害福祉のノウハウ、スピリッツを教わったという。田ヶ谷先生の関わってきたこの七十年とはまさに、終戦から現在に至る七十余年の社会・思想の流れと合致するものだ。占領下の日本、戦災孤児が町中にあふれていた。食べ物もない中で、親を亡くした孤児たち。当時大人気のラジオドラマ「鐘の鳴る丘」のテーマソング「とんがり帽子」には親を亡くした子供たちが希望をもって生きていけるように、との願いが込められている。講話の中で先生はこの歌を「知らない方もおられるだろうから紹介しま

す」と歌われた。会場いっぱい拍手。

その中にいわゆる知的障害のある子どもたちがいた。より重度の方々を支援してきたひばりが丘学園の話があった。職員の多くが女性、しかも人数も少なく、四日に一度宿直があり、泊まりあけもそのまま勤務。二四時間労働だった。でも「この子たちの命と生活は私たちが守る」という使命感からとても仲良く、協調して支援に当たる楽しい職場だったという。女性の支援者は皆スカートをはいて仕事をしていたそうで、利用者さんたちにとつて「お母さん」をイメージできるから、ということだ。正直驚いた。

菅先生の治療教育の理念「能力の低さや偏りを許容する（倫理的観点から問題を論じない）まず受け入れる、アクセプトすること。



行動障害はその人が置かれた環境下で本当の自分を表す最も自然な行為、と理解し支援に当たらねばならない、ヒューマニズムだと。このことを菅先生から学んだと熱く語っておられた。

田ヶ谷先生はその長いキャリアの中で、ご自身の最終的なまとめ、集大成として小規模の通所施設を設立したいと勝沼授産園を創設されたという。

時として、現在の支援者に対して厳しい言葉も語られたが、大きな厚みのあるその経験とそのお人柄からだろう、それはすべて私たち後輩への励ましと心の支えとなる珠玉の言葉であると感じた。

祝宴の最後には平塚にある進和学園の当事者・職員の方々によるバンド「とびつきりレインボーズ」による演奏、会場は大きな拍手で会を終了した。

終わりに。創立六〇周年記念号「のびろ」の出縄守英会長（進和学園）の言葉を引用する。

どんなに変革があっても、「あのおぞらプラン」の理念は変わりません。よって私たちの歩みは止まりません。・・・お互いに悔いな

あおぞら宣言 (知的障がい施設利用者権利宣言) 前文

2016年、大変不幸な事件が起きました。それは「障がい者はいなくなればいい」という大変勝手な考えに基づいた事件でした。もし自分に障害があったらどんな気持ちになりますか。障害がある人もない人もみな同じ人間です。同じようなことを考えます。どうやって生きていったらいいのか、どうしたらみんなに理解してもらえるのかをいつも考えていますが、むずかしいことです。社会に出ると何か遠い目で見られているような時があってとても悲しい気持ちになります。でも社会には自分の悲しい気持ちを励ましてくれたり、なぐさめてくれる人がいます。そうした時、私は一人で生きているのではないと失いかけた自信を取り戻したりします。ここに私たちの思いを六条にこめて、障がい者としてではなく、一人の人間として力強く生きていくことを宣言します。

き人生を送りたいのです。「山あり谷あり、だから面白い人生だった。」そんなご本人の心の声を聴くために、ともに歩みを進めましょう・・・」

きょうされん 障害福祉の報酬改定に 対する団体署名

会員事業所へ署名協力を要請

昨年十一月、きょうされんより神奈川県障害者地域作業所連絡協議会(以下県障作連)への要請があり、会員事業所へ緊急署名に対するの協力要請を行った。要請依頼文の内容を一部抜粋する。

職員不足と物価高騰による負担増を解決する二〇二四年度 報酬改定を求める緊急要望書

現在、厚生労働省がすすめている二〇二四年度の報酬改定は、昨年八月の国連・障害者権利委員会による対日審査を経て、多くの勧告を盛り込んだ総括所見を受けて行なわれる、初めての改定となります。その意味では、総括所見で

指摘された改革の方向性を視野に入れた制度・施策の抜本的な改定が期待される所です。さらに、昨今の危機的な職員不足や物価高騰への対策、十月からの最低賃金引上げへの対応は、急務の課題となつていきます・・・

年度「当初予算に係る要望」を県行政、県議会各会派に提出しており、年末には、自由民主党神奈川県支部連合会よりご回答もいただいた。要望内容については今回の報酬改定を意識し、特に、より重度の障害のある方が多く利用する私たち会員事業所の実情を踏まえ、実態に即した報酬改定となるよう訴えてきた。

要望内容は左表の通りだ。県障作連としては、昨年夏、「令和六

就労継続支援B型における平均工賃月額等に応じた基本報酬のあり方、施設外就労の廃止、送迎加算、級地区分、重度の障害者のグループホームの利用について等、

日ごろの支援の実態から、私たちの切実な思いを要望したものだ。また、地域生活支援事業における統合補助のあり方についても会員の多くを占める地域活動支援センターの運営がより安定的に進められるようにと、大きな柱として要望内容に取り入れてきた。

回答においても、それぞれの個々の項目については、重度の障害者の地域生活を支えるうえで重要な支援ととらえ、令和三年度の報酬改定での方向性をさらに進める、あるいは新たな課題に即した報酬改定となるように議論を進め

1. 危機的な職員不足の解決、最低賃金引上げへの対応、安定運営を実現するために、基本報酬・加算の大幅プラス改定をしてください。
2. 引き続き物価高騰による際限のない利用者・事業所の負担増をくいとめる報酬改定をしてください。
3. 食材費・水道光熱費の大幅高騰によって、利用者・事業所の負担が増えている現状を踏まえて、食事提供体制加算を継続し、拡充・恒久化してください。

検討して取り組む、という趣旨の回答をいただいた。

前述の依頼文にもあるように、今回の改定は国連・障害者権利委員会による対日審査を経て、多くの勧告を盛り込んだ総括所見、を受けて行なわれる初めての改定であり、総括所見で指摘された改革の方向性を視野に入れ、制度・施策の抜本的な改定が期待されるものである。

国全体の経済の動向は言うまでもなく、長引くデフレからの脱却、生産性の向上、雇用の改善や賃上げ等々、あらゆる場面で議論されている通りだが、日本の障害施策予算は、対GDP（国内総生産）比一・二%の現状で、OECD平均の二%を二〇年以上にわたり大きく下回り、三十八ヶ国中三十位という現状だという。そのような状況下での今回の団体署名は障害福祉関係者の切実な思いを訴えるものだろう。きょうされんの団体署名に協力できたことが今後の一歩につながっていくようにと願うところだ。

(きょうされんHPより)

二〇二三年十一月のとりくみ

発行 神奈川県障害者定期刊行物協会

〒222-0035 横浜市港北区鳥山町1752番地

障害者スポーツ文化センター横浜ラポール3階横浜市車椅子の会内

編集

(特非)神奈川県障害者地域作業所連絡協議会
〒222-110825 横浜市神奈川区反町3丁目17-2

045(290)0501
頌価 百五十円

障害福祉の報酬改定に対する団体署名にご協力を！

職員不足の解決 物価高対策 食事提供加算の継続

団体署名と取り組み期間
12月 末まで

団体署名は、法人、事業所、家族会、障害団体、ボランティア団体、市民団体など、あらゆる団体が可能です。

「ハローワークに求人を出しても応募者が1人もない」「慢性的な職員不足で職員が疲弊し、十分な支援ができない」「物価高騰でますます運営は厳しく、給食の経費負担が重い」。これらは全国各地の障害福祉事業所が直面している事態です。しかし、厚生労働省は「障害福祉予算が5年間で3倍増した」という視点から、2024年度の報酬の見直しを検討しています。さらなる削減が生じれば、現場の支援はますます苦しくなり、障害のある人の生活に大きな影響を及ぼしてまいります。そこで、緊急の団体署名にとり組み、多くの声を集め、厚生労働省に届けることになりました。ぜひとも、多くの団体、事業所、法人のご協力をお願い申し上げます。

編集後記に変えて

石川県能登半島地震の被災地に思いを寄せて

義援金送付へのご協力を！

能登半島地震は、二〇二四年一月一日十六時十分、石川県能登半島にある鳳珠郡穴水町の北東四十二kmを震央として発生した。地震の規模はマグニチュード七。六、震源の深さは十六km。観測された最大震度は、石川県輪島市と羽咋郡志賀町で震度七。

元旦早々の地震、翌日は航空事故と、令和六年は大きな衝撃ではじめてしまいました。遠く離れた地でのこととはいえ、ご親族や友人知人の方で被災された方との話もたくさん聞きました。災害は人ごとでないことを実感します。障害のある方は避難所へも行けず車中泊でご家族と長期間暮らしている等々。幹事会でも、知人の方とやと連絡が取れ、無事でいてくれて胸をなでおろした、いまだにメールや電話でも連絡が取れていない、などいくつかの事例を共有しました。地形的なこと、高齢化の問題等々でいまだに思うように復旧が進んでいない。報道でもこの問題が大きくなり取り上げられています。

当会は「ひとりよりふたり。ふたりよりたくさん。」をモットーに活動しています。今回のような非常時には、どうしても社会的に弱い方たちが大きなしわ寄せを受けてしまいます。でも、それは平時の日常でも同じなのかもしれません。私たちの視線はどの高さで何を見ているのか。改めて考えてしまいました。

実際につながるのにはどんなに困難でもまずは「思いを寄せること」それくらいしかできないとしても、です。日々の活動で手いっぱいなの私たちです。できれば現地へ行って少しでもお手伝いができることを考えたい。なにか…。遅くなってしまうかもしれませんが、県障作連として義援金を送る準備を進めています。会員の皆様、ぜひご協力をお願いいたします。

(理事長 六反芳樹)